〈研究動向〉

明末清初におけるオランダ東インド会社の動向

―一六五五年の遣清使節を中心に―

岩井優典

はじめに

一六〇二年に設立されたオランダ東インド会社は、一七九九年に解散するまでおよそ二〇〇年にわたり存続した。その中でも最初の一世紀、一七世紀がオランダ東インド会社の黄金期だという見方は強い。しかし、だからと言ってオランダ人たちが世界各地の海において我が物顔で行動していた、というわけではなかった。特に東アジア圏において軍事力、経済力で劣っていたオランダ東インド会社の貿易活動は江戸幕府や明・清両王朝、そして鄭氏の強い干渉を受けながら行わざるを得なかったのである。

一六六二年に当時大きな利益を上げていた台湾を、南京での敗北により新たな拠点を求めていた鄭成功に奪われたことは、東アジアでのオランダ人の影響力の限界を示す最たる例と言えるだろう。だからと言って中国がこの時代安定して強大だった、と考えるのは早計である。一七世紀、特にその中期に置いてオランダ東インド会社が黄金期であったのに対して、中国ではちょうど李自成の北京入京、そして清の入関と明末清初の混乱期にあたり、この混乱は、三藩の乱が解決し、台湾の鄭氏政権が降伏する一六八〇年代まで続いていた。鄭成功がオランダ東インド会社を台湾から追い払った原因を、この時期の明と清の闘争によるものだとするならば、オランダ人たちは明末清初の混乱にかなりの影響を受けたと言えるかもしれない。もっとも中国と日本の中継貿易によりその利益の大半を上げていたオランダ東インド会社の交易は、明の滅亡以降増えていた日本に到来する中国人の商人集団によって追い抜かれていたであろう。

明末清初の動乱、オランダ東インド会社の貿易はどちらも古くから注目を受けており、とても全ての研究を紹介しきれるものではない。そこで、本稿ではオランダ東インド会社の明清期における研究、特に著者が今後深く調べていきたいと考えている一六五五年のオランダ東インド会社から清への使節に関するものは多少詳しく紹介していく。

一、オランダ東インド会社と明清期中国

オランダ東インド会社に関する研究は、従来より様々な国の視点から行われてきた。本国オランダにおける近年の研究ではフェッメ・ハーストラ氏がオランダ東インド会社全体の歴史に関して詳細にまとめたものがある。[1] 対して日本では一九七〇年代の永積昭氏の研究[2]をまず挙げることができるだろう。それまでの日本の研究がオランダ東インド会社のオランダからの視点に着目していたのに対し、永積昭氏の研究では東インド、すなわち現地からの視点、特に氏の研究の専門分野であるインドネシアを含む東・東南アジア地域の方に着目し、その地におけるオランダ東インド会社の活動を具体的に検証していったものである。また、科野孝蔵氏の研究[3]も同様で、それまでのオランダ東インド会社の研究が制度史からの観点であったのに対し、日本との貿易に関する史料を中心に扱い、当時行われてい

た日蘭間の貿易の実態をつかむことを主眼に置いている。科野氏はオランダ東インド会社がアジアの経済にどれほどの影響をもたらしたかは諸説あるとしながらも、一七世紀の東アジア市場に置いて一定の地位にあったと述べている。

近年の日本におけるオランダ東インド会社に関する研究としては羽田正氏のもの[4]がある。羽田氏は、オランダ東インド会社に限らず、従来の東インド会社の研究が各国ごとの研究になっていたり、複数の国について研究しているものはアジアの一つ一つの国々への研究になっていたりと一つ一つが細かくなっているとして、オランダの他、ヨーロッパ諸国の東インド会社が残した史料や蓄積された研究を統合し、一貫して捉えなおす必要があると述べている。島田竜登氏の研究[5]も貿易に主眼を置いており、オランダ東インド会社は一七、一八世紀において海域アジア圏における一大勢力であったとしている。また、オランダ東インド会社の主要な貿易体系であったアジア間での貿易における役割を探り、同時に、その盛衰や記録は近世海域アジア史研究の大きな基礎になると述べている。

これらの研究では、『バタヴィア城日誌』などによる報告をもとにオランダ東インド会社のアジア圏における貿易の歴史について詳しく書かれている。しかし、東南アジアでの貿易に関する記述や日本との貿易に関する記述が中心となり中国との貿易に関してはさほど詳しく述べられてはいない。だからといってこの時代のオランダ東インド会社は中国との関わりが薄かったわけではなく、むしろ一六二四年から一六六二年までの三八年間、台湾に商館を持っていることからもわかるように、中国に基盤を置き、貿易を積極的に行おうとしていた。その上、永積昭氏の研究の中で述べられているように[6]、一七世紀中期のオランダ東インド会社の貿易収支において日本に次ぐ第二位の地位を記録していたのは台湾であった。

この時期の中国に関する研究もまた膨大な量があるが、この中では対外関係に着目し、いくつかの研究を紹介する。対外関係の研究の中で古くから存在しているものとしてはまず、矢野仁一氏の研究[7]が存在する。坂野正高氏の研究[8]はアヘン戦争以後の清、中華民国に関する部分を中心として扱いながらも、明代から五・四運動までの期間における中国に関わる各国の外交文書をまとめたものであり、出版されてから四〇年近くたつ現在でもこの本に勝るほど外交文書に関して、多角的な編纂をしたものはない。

近年のものとしては、上田信氏の研究[9]、岸本美緒氏の研究[10]が存在する。上田氏は近代世界システムの理論に立って、中国と海の関係を明代から清代までのおよそ五〇〇年間に渡って見ていくことで、この時代に海を通してつながっていた日本、ヨーロッパと言ったユーラシア諸地域との共進性を感じることができ、それによって中国がヨーロッパ世界によって変容させられることになったかを見ることができると述べた。また、明末清初の時期である一七世紀はユーラシア全体において不況であり、中国で政権が代わるのと同じくヨーロッパにおいても覇権がスペイン・ポルトガルからオランダ、そしてイギリスに代わる変動の時代であったと述べている。岸本氏は中国の民衆に着目し、一七世紀以降の市場の統制が厳しかったそれまでの社会から商業的・市場的な社会となった一六世紀の方が生活文化にかかわる変化は大きいとしながらも、一七世紀の社会における変化も十分にあると述べている。氏はまた一五六七年に海禁令が解除されて以降活動的な冒険的貿易商人や海賊たちが多かった明末

の混乱期と比べると、鄭氏政権が降伏した後の一七世紀末は彼らがその姿を消しており、この海域は静かなものになったと述べている。どちらの研究においても、オランダ東インド会社との関わりはそれなりにあったと述べられているが、中国側のオランダ人に関する資料がほとんど残されていないことからか同時代の中国におけるヨーロッパ人の活動と言うことであればまず、マテオ・リッチやアダム・シャールと言ったイエズス会の宣教師たち[11]の名が挙げられる。そのため、オランダ東インド会社が果たした役割について、特に貿易面以外に関しては、さほど研究が進んでいないように思われる。

二、オランダ東インド会社と中国の関係〔一六五五年以前〕

オランダ東インド会社と中国の関係の歴史をまとめたものとしては、レオナルド・ブリュッセイ氏の研究[12]とジョン・ウィルズ氏の研究[13]が存在する。彼らによれば、両国の関わりはオランダ東インド会社設立以前、東インド会社の前身である"Oude Compagnie"（旧会社）がスペインやポルトガルが大きな利益を上げている極東地域に進出すべく中国に船を派遣したことから始まる。

しかしながらこの船団は、マカオでポルトガル人の邪魔に会い、中国人と話すことなく戻ることを余儀なくされ、その後も一六〇四年にウェイブラント・ファン・ワールウェイクが交渉に赴くなどしたがいずれも失敗した。一六二二年にはヤン・ピーテルスゾーン・クーンの命令を受けた艦隊がマカオを攻撃したが、ポルトガル人らの反撃を受けて返り討ちに会い、澎湖諸島を占領するもこちらもポルトガル人の妨害を受けて失敗した。ここで澎湖諸島から退去する代わりとして、中国商船の台湾への渡航を妨げないことを条件にオランダ人たちは台湾を確保した。というのも、当時の台湾は未開の状態で、わずかに鹿皮が得られる程度の状態であり[14]、その価値は低かったためである。ともあれ、初代商館長であるマルティネス・ソンクの下オランジ城（のちのゼーランディア城）を建設し、ここから三八年に及ぶオランダ東インド会社の台湾統治が始まったのである。

この時期のオランダ東インド会社研究としては林田芳雄氏のものがまず挙げられる[15]。氏は『バタヴィア城日誌』、『ゼーランディア城日誌』、『東インド事務報告[16]』を中心に『明実録』、『台湾外記[17]』などによる中国側の史料と比較してオランダ東インド会社の動きを捉えている。氏はまたオランダ東インド会社の一六二四年から一六六二年まで、計一二人の長官による台湾統治を大きく分けて三期に分けることができるとし、最初の四人の商館長の時代（一六二四～一六三六）を第一期、次の四人の商館長の時代（一六三六～一六四六）を第二期、最後の四人の時期（一六四六～一六六二）を第三期とした。これらはそれぞれオランダ東インド会社による台湾統治の勃興期、安定期、衰退期にあたる。このうち、第一期のオランダ東インド会社の統治に関してはブリュッセイ氏の研究[18]が、貿易に関しては永積洋子氏の研究[19]が存在する。永積洋子氏によれば、このオランダ東インド会社による台湾貿易の確立において重要な役割を果たすのは「ある個人の海上指導権、商業的な結合、中国の官憲または外国人と調停する才能」を持った現地出身の海賊と冒険的貿易商人であった。林田氏がこの時代を中国海沿岸が最も荒れ狂った時代と評したように、この時代、明の弱体化が一層深刻となり、海上は明の支配

が及ばなくなりつつあった。代わりにその地域をまとめる集団として頭角を現したのが福建や平戸と言った地域を拠点に置く海賊や商人の集団であった。そして、貿易商人（彼らのほとんどは海賊と表裏一体であった）たちをまとめる存在が頭人であり、オランダ東インド会社が中国近海に訪れるようになった一六一〇年代に頭人の一人として平戸に拠点を構えていた人物こそが中国人の商人、李旦であった。彼はオランダ人が初めて台湾に渡航すると進んで中国貿易の仲介役を買って出ることとなったが、実際はほとんど働かず、むしろ金品を搾取し海賊行為を行っていたのである。しかしながら、オランダ東インド会社としては各地に顔のきく李旦を、一方では信用ならない人物だと思いながらも関係を断つことはできなかった。李旦の死後も、李旦の代理人として中国本土で活動していた許心素がその後を継いで同じく中国貿易の仲介役を行った。だが、心素は一六二八年にかつてオランダ商館で通辞をしていた鄭芝竜との政争に敗れ、殺されてしまう。鄭芝竜は同年、海上の統制を図りたい明によって招聘され、海防遊撃となったが、この時点ではまだ彼の権力に歯向かうものも多く、一六三六年に彼が福州の都督になるまでの間は、様々な海賊との戦いがあり、中国沿岸が安定するのはこれ以後のことである。

一六三〇年代後半に入ると、ようやく中国沿岸が安定したことと、オランダ東インド会社が台湾での貿易体制を確立したことも相まって、東アジアにおいてオランダ東インド会社は黄金期を迎える。だが、ようやく迎えた黄金期も長続きはしなかった。一六四〇年代に入るとオランダ東インド会社から日本への主な輸出品であった生糸、絹織物が徐々に減少していくことになった[20]。この原因は中国船によるトンキンから日本への輸出の増加であり、その背後には鄭芝竜の姿があった。永積昭氏の研究[21]によれば、一六四四年にはオランダ東インド会社の日本に対する生糸の輸出量は中国船、すなわち鄭氏の派遣する船に圧倒されるようになったのである。

三、オランダ東インド会社と中国の関係〔一六五五年以後〕

『バタヴィア城日誌』によれば、オランダ東インド会社が清に使節を派遣したきっかけは以下の通りである。清朝がマカオにいるポルトガル人以外のヨーロッパ人とも広州での貿易を行うとの報告をイエズス会士、マルティノ・マルティニがバタヴィア総督のヨハン・マーツァイケルに行った。それを受けたマーツァイケルは台湾総督のニコラス・フェルブルフに貿易許可をとるための商務員の派遣を命じた。それを受けたオランダ東インド会社の台湾評議会の商務員、フレデリック・スヘーデルが広州に赴いた際、北京への正式な派遣を勧められ、これを受けたマーツァイケルはオランダ本国の一七人会に公式使節の派遣を建議し、容認された[22]。この時の順治帝の勅諭はおおむね以下のとおりである。

道のりは遠く、波風が激しいために、船で難儀し、長年月をかけて本朝に至る。その労苦は哀れむべきことである。貢朝が頻繁であれば、わずらわしいこと甚だしいであろう。それは朕には忍びないことである。しかるがゆえに、八年に一度朝貢すればよろしい…[23]。

この八年に一度という文言が重要で、多くの研究者たちが述べている通り自由な貿易を求めていたオランダ東インド会社にとって八

年に一度しか朝貢（貿易）の機会が得られないという結果は大きな不満の残るものとなった。

一六五五年の使節団に主眼をおいた研究としてはまずファン・デン・ファルク氏の未刊の研究がある。日本の研究としては、まず永積昭氏が『世祖章皇帝実録』と『粤海関志』に見られる順治帝の勅諭と、オランダ側の訳文を照らし合わせ、『館』という言葉が互いの記録でどう書かれているかを見、清朝側とオランダ東インド会社側の理解の相違について述べている他、この使節派遣の際に下された八年に一度の朝貢期間が一六六一年以後のオランダ東インド会社の対清交渉においてオランダ側を拘束していると述べている。[24]

この他のオランダ東インド会社と中国との関わりをまとめた研究でも一六五五年の使節は少なからず登場しており、ウィルズ氏とブリュッセイ氏はオランダ側が毎年の朝貢を望んでいたにも関わらず、順治帝の指示する朝具の頻度が、礼部の提示する五年に一度より低い八年に一度となった原因として、当時清朝で大きな影響力を持っていたイエズス会士、アダム・シャールの影響を指摘している。[25]

また、ウィルズ氏は鄭氏集団の邪魔により貿易利益が下がった現状から、中国の港にオランダの船を自由に来航できるようにすることで、台湾統治の損失を避けようとしたのではないかとも述べており、[26]林田氏も一六五五年の使節は対清貿易の拡大を第一使命としながらも、当時、すでに台湾付近で大きな権力を持ちつつあった鄭氏集団に対しての安全保障の可能性を探ろうとするオランダ側に、鄭氏集団の動きを牽制しておきたい清側が関心を示したためともと述べている。しかし、同氏はまた、順治帝の勅諭の中で、鄭成功について述べているところはないとも述べており、オランダ東インド会社側の期待した成果はゼロに等しいと述べている。この一六五五年の使節の評価としては、前述のようにオランダ東インド会社側が自由な貿易を望んだことに対し、順治帝側からは八年に一度の朝貢を命じられたために貿易的にみると失敗だとするのが一般的である。更には鄭氏集団に対する牽制という面でもオランダ東インド会社と清の双方がこの使節によって協調体制をとるようなったわけではないため、こちらでも失敗に近いという見方が強い。

この時代以後、特に一六六二年の台湾喪失後のオランダ東インド会社と清との貿易を中心に扱ったウィルズ氏の研究[27]が最も有名である。この他にも、永積昭氏の研究[28]がバルタサル・ボルトの交渉を中心に一六五五年の使節から一六六四年のアモイ、金門に拠点を置く鄭氏政権へのオランダ・清の連合軍による攻撃までのおよそ一〇年間を扱っている。オランダから台湾を奪った後の鄭氏政権の動きについては林田氏の研究[29]に詳しく載せられている。オランダ東インド会社が台湾を喪失するのに前後して清は遷界令を発した。これは、海岸沿いの住民たちを一様に内陸部に強制移住させ、鄭氏との交易を禁じた政策であったが、これは同じく中国沿岸にいたオランダ東インド会社にも打撃となっていた。永積昭氏によればオランダが台湾喪失後に清に歩み寄った理由の一つとしてこの遷界令の撤回があったようである。[30]しかし、遷界令を撤回した後は多くの中国人たちが貿易を求めバタヴィアへとやってきたため、わざわざ危険を冒してまで中国に向かう必要性がなくなってしまう。こうした状況を鑑みたアムステルダムにあるオランダ東インド会社のトップと言える一七人会は一六八九年に中国人との貿易をバタヴィアにやってくるものに限定したことで一七世紀のオランダ東インド会社と中国人と

の関わりは終結を迎えた。

四、オランダ東インド会社と中国〔一七世紀中葉〕

オランダ東インド会社の同時代史料として最も有名なものは『バタヴィア城日誌』[31]であろう。これは各地の商館からバタヴィアに送られた報告を纏めたものである。このうち日本、台湾部分だけを抜粋した日本語訳が出版されており、当時代のオランダ東インド会社の動きを調べる上では最も便利なものと言える。また、日本で平戸、出島に存在したオランダ商館の商館長が主な出来事などをまとめた『オランダ商館長日記』の台湾商館版として『ゼーランディア城日誌』[32]が存在する。この他、台湾の喪失に関しては台湾最後の商館長となったフレデリック・コイエットの残した『閑却されたるフォルモサ』[33]が存在する。その中でコイエットは、台湾喪失は自分の責任ではなく、鄭氏の侵攻が間近に迫る中、中途半端な援助しか与えなかったバタヴィアの権力者たちの責任だと述べている。

一六五五年の使節団に同行したオランダ東インド会社の職員、ヨハン・ニーウホフがオランダに帰国後出版した『オランダ東インド会社派遣使節中国紀行』[34]は、当時文章ばかりであった中国に関する書物としては珍しく、版画を利用した絵が挿入されており、彼の絵がのちのシノワズリにおいて一定の影響を与えることになる。[35]ただ、挿入された絵についてはニーウホフの「私が中国で書いた文章とスケッチの入った日記、あるいは中国への使節団の旅行記は兄の監修の元で出版されるため、兄に譲った」[36]という発言もあって、兄のヘンドリックの描き加えがあったのではないかとの真偽が当初より疑われており、一九八四年にパリでニーウホフの書いた原本の日記とスケッチが発見されたことで、ヘンドリックの手でより幻想的に見せるための装飾が施されていることが確認された。[37]このニーウホフの本の後、オランダ人医師、オルフェルト・ダッペルがオランダ東インド会社による一六六〇年代の二度の遣清使節団に関する話の編集を依頼され、『オランダ東インド会社遣清使節紀行』[38]というタイトルで一六七〇年に出版された。これはニーウホフの先の本にもまして中国での話に派手な虚構を加え、版画にも派手で幻想的な装飾をくわえていた。ブリュッセイ氏はこのダッペルの装飾に対し、読者の側がそれを期待していたため加えられたと述べている。[39]

中国側の史料にはあまりオランダに関する記述は見られないが、オランダ人の名がみられるものとしてはまず『明実録』、『清実録』の二つが存在する。特に『清実録』のうち『世祖章皇帝実録』に一六五五年のオランダ東インド会社による使節団の派遣の様子が詳しく描かれている。この他にも『粤海関志』、『明清史料』の二つにも一六五五年の使節団の様子は載せられている。オランダ、中国の両国と関係があった日本としても中国の王朝交代、鄭氏の動きには注目しており一六四四年から一七一七年までの七三年間、日本に来航した唐船頭より聞き取ったものを記した『唐人風説書』を幕府の儒学者、林春斎、林信篤がまとめた『華夷変態』でもこの時代の中国の外交は詳しくまとめられている。

おわりに

一七世紀のオランダ東インド会社と中国の関係について述べたも

のの多くはその貿易面を重要視しており、貿易面において新しい発見をなすことは困難であろう。また、当時の東アジアの海におけるオランダの外交やオランダ東インド会社の台湾統治という点でもすでに一定の研究成果は出ている。一六五五年の使節団の評価が貿易面と外交面の二点によって失敗との評価がなされていることは一つの例と言えよう。しかし、これ以外の面、例えば文化面における評価というものは特に日本においては見過ごされてきている。一七世紀においてオランダで花開いたシノワズリにおいて、ニーウホフやケッペルらの書いた中国に関する旅行記はこれらの使節団に同行したり、同行したものの話をまとめたものが基となっている。この様に、貿易や外交だけでなく文学、絵画的な側面からもオランダと中国の関係を見直していく必要があるだろうと筆者は考えている。

注

(1) Femme S. Gaastra, *De geschiedenis van de VOC*, Fibula-Van Dishoeck, 1982 ;Do., *The Dutch East India Company: expansion and decline*, Walburg Pers 2003.

(2) 永積昭『オランダ東インド会社』(近藤出版社、一九七一年)。

(3) 科野孝蔵『オランダ東インド会社の歴史』(同文舘、一九八八年)。

(4) 羽田正『興亡の世界史15　東インド会社とアジアの海』(講談社、二〇〇七年)。

(5) 島田竜登「オランダ東インド会社のアジア間貿易」『歴史評論』(六四四号、二〇〇三年)及び同「近世アジアの交易世界」『歴史と地理』(六三四号、二〇一〇年)。

(6) 永積昭、前掲書。

(7) 矢野仁一『近世支那外交史』(弘文堂書房、一九三〇年)。

(8) 坂野正高『近代中国政治外交史』(東京大学出版会、一九七三年)。

(9) 上田信『中国の歴史9　海と帝国』(講談社、二〇〇五年)。

(10) 岸本美緒『世界の歴史12　明清と李朝の時代』(中央公論社、一九九八年)。この他にも氏の本としては地域社会論的な方法で一七世紀の江南地域に着目した『明清交代と江南社会』(東京大学出版会、一九九九年)があり、こちらは江南地方を元として当時の中国の地方社会生活を書いている。

(11) イエズス会宣教師に関する史料としては矢沢利彦編訳『イエズス会士書簡集』(平凡社、一九七〇年)がある他、オランダ東インド会社の最盛期とはずれるが、マテオ・リッチ著／川名公平訳／矢沢利彦注『キリスト教布教史』(岩波書店、一九八二年)も存在する。更に宣教師の書簡から皇帝やその家族、宮廷生活に関するものを抜粋しまとめたものとして矢沢利彦『西洋人の見た中国皇帝』(東方書店、一九九二年)が出版されている。

(12) レオナルド・ブリュッセイ／深見純生他訳『竜とみつばち―中国海域のオランダ人四〇〇年史』(晃洋書房、二〇〇八年)。

(13) John E. Wills, *Pepper, Guns and Parleys The Dutch East India Company and China,1622-1681*, Harvard University Press, 1974 ;Do., *DE VOC en de Chinezen in Taiwan, China en Batavia in de 17de en 18de eeuw*, Unieboek, 1976 前者は台湾喪失後のオランダ東インド会社の交易を中心に書かれた論文であり、本稿でも紹介している。後者は一七世紀から一八世紀にかけて、

オランダ東インド会社と中国人たちの関係を歴史にそって述べた論文である。

(14) 永積洋子『近代初期の外交』(創文社、一九九〇年)及び同「十七世紀の東アジアの貿易」(浜下武志、川藤平太編『アジア交易圏と日本工業化1500-1900』藤原書店、二〇〇一年より)。

(15) 林田芳雄『蘭領台湾史—オランダ治下38年の実情』(汲古書院、二〇一〇年)。

(16) 原題"VOC Archieven""Koloniale Archieven"とも呼ばれていた。

(17) 江日昇により一六二一年から一六三三年までの六二年間の記録を纏めたもの。全一〇巻。

(18) ブリュッセイ、前掲書。

(19) 永積洋子、前掲書。

(20) 同上書。

(21) 永積昭「鄭氏攻略をめぐるオランダ東インド会社の対清交渉」『東洋学報』(四四号、一九六三年)。

(22) ブリュッセイ、前掲書。

(23) ブリュッセイ、前掲書。『世祖章皇帝実録』にのっている順治帝の勅諭の一部抜粋。

(24) 永積昭、前掲論文。

(25) ブリュッセイ、前掲書、wills, *op. cit.*

(26) *Ibid.*

(27) 同前。

(28) 永積昭、前掲論文。

(29) 林田芳雄『鄭氏台湾史—鄭成功三代の王興亡実紀』(汲古書院、二〇〇三年)。

(30) 永積昭、前掲書。

(31) 原題"Dagh-Register gehouden int Casteel Batavia vant passerende daer ter plaeste als over geheel Nederlandts-India"このうち日本、台湾に関する部分を抜粋してまとめたものが村上直次郎訳「抄訳バタヴィア城日誌」として一九三七年に出版され、そこから更に未訳の下巻部を再度加えた中村孝志校注「バタヴィア城日誌」が一九七〇年から一九七五年にかけて平凡社より全三巻として出版された。

(32) 原題"De Daghregisters Van Het Kasteel Zeelandia, Taiwan, 1629-1662"台湾では二〇〇〇年より中国語訳が全四巻の予定で刊行されており、現在第三巻まで刊行されている(江樹生訳「熱蘭遮城日誌」)。

(33) 原題"'t Verwaerloosde Formosa, of Waerachtig verhael, hoedanigh door verwaerloosinge der Nederlanders in Oost-Indien, het eylant Formosa, van den Chinesen Mandorijn, ende zeeroover Coxinja, overrompelt, vermeestert, ende ontweldight is geworden"日本では生田滋『オランダ東インド会社と東南アジア』(岩波書店、一九八八年)の中にその訳文が収められている。

(34) 原題"Het Gezandtschap der Neêrlandtsche Oost-Indische Compagnie, aan den grooten Tartarischen Cham, den tegenwoordigen Keizer van China: Waarin de gedenkwaerdigste Geschiedenissen, die onder het reizen door de Sineesche landtschappen, Quantung, Kiangsi, Nanking,

Xantung en Peking, en aan het Keizerlijke Hof te Peking, sedert den jaren 1655 tot 1657 zijn voorgevallen, op het bondigste verhandelt worden. Beneffens een Naukeurige Beschrijvinge der Sineesche Steden, Dorpen, Regeering, Weetenschappen, Hantwerken, Zeden, Godsdiensten, Gebouwen, Drachten, Schepen, Bergen, Gewassen, Dieren, etcetera en oorlogen tegen de Tartars". 一六六五年にヨハン・ニーウホフの兄ヘンドリック、ヤコブ・ファン・ムールスらによってオランダ語版、フランス語版が共に出版された。翌一六六六年にドイツ語、一六六八年にラテン語、そして一六六九年に英語版と次々にされており、その注目の高さが窺い知れる。日本でも一八世紀に蘭学者の山村才助によって『奉使支那行程記』として翻訳されたが、その訳稿は既に失われている。

(35) ブリュッセイ、前掲書。

(36) Leonard Blussê en R.falkenburg *Johan Nieuhofs beelden van een Chinareis 1655-57*, Midderburg:Stichting VOC ublicaties,1987より。

(37) *Ibid.*

(38) 原題 "Gedenkwaerdig bedryf der Nederlandsche Oost-Indische Maetschappye, op de kuste en in het Keizerrijk van Taising of Sina: behelzende het 2e gezandschap aen den Onder-Koning Singlamong ... Vervolgt met een verhael van het voorgevallen des jaers 1663 en 1664 op de kuste van Sina ... en het 3e gezandschap aan Konchy, Tartarsche Keizer van Sina en Oost Tartarye ... beneffens een beschryving van geheel Sina"

(39) ブリュッセイ、前掲書。

（本学文学研究科史学専攻博士課程前期課程）